慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代社会における「生きづらさ」と「アイデンティティ」： 生き方の多様性と社会
Sub Title	Problematic experience and identity in contemporary society
Author	草柳, 千早(Kusayanagi, Chihaya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2001
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.6 (2001.) ,p.51- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20010000-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代社会における「生きづらさ」と「アイデンティティ」

生き方の多様性と社会

Problematic experience and Identity in Contemporary Society

草柳　千早

1．はじめに[1)]

現代社会では、個人のより快適で幸福な生の追求が尊重されることになっている[2)]。とはいえ、社会では多様性は制限される。社会が許容しないあるいは許容に消極的な多様性を体現する者は、それゆえの「生きづらさ」を経験しそれに何らかの仕方で対処していく。本稿は、このような諸個人の現代社会におけるアイデンティティと活動のあり方に目を向け、人々の「生きづらさ」の経験がいかに社会へと媒介されうるのかについて考える。

周縁化された諸個人の経験と活動およびその社会への関係は、これまでも社会学的関心の対象であった。それは端的に、個人と社会という社会学の根本問題の部分であろう。一方には、伝統的な集合的行為論、社会運動論の関心が挙げられる。かつて伝統的な社会運動論は、人々の「不満」の経験を社会運動や革命への参加動機としてその理論的仮説に組み込んだ（高橋 1985）。だがその照準は、あくまで運動という集合的な現象に合わせられていた。他方、行為者の意味世界の側に定位した関心がある。シンボリック・インタラクショニズムの系譜に見られるように、そこには「逸脱者」「アウトサイダー」としての人々の経験の過程への関心を見い出すことができる（例えば Becker 1963 etc.）。今日こうした異なるアプローチとその問題領域は、集合的な社会運動を社会的構成として捉え直そうとする見方により接近しつつあるようにも思われる(Melucci 1996)。

以下では、上の課題に従い、まず、従来の概念で言えば「逸脱的」マイノリティとされる人々のアイデンティティと「生きづらさ」への対処について、既存の理解の枠組みを考察する。ここでは２つの典型的な理解の枠組みを取り上げ検討したい。その上で、さらにこれらとは異なるものとして、現代日本における人々のあり方を検討していく。事例として、ここでは異性愛でない女性に関するデータを参照する。

なお言うまでもなく、冒頭で述べた多様性とは文字通り多様であり、本稿で見る人々によって代表されるわけではない。多様性の総体を検討することはその意味上不可能であり、私たちに可能なのは、個別の事例を通して仮説的な見通しを得ていくことであろう。ここで取り上げる事例は、近現代社会における恋愛・結婚・性・家族の制度によって制限されてきた生き方の多様性の一部ということができる。もちろんそこからの「逸脱」も多様でありえ、人はまた多

様な問題に遭遇しうる。しかし共通には次のようなことがあろう。すなわち、人はそこから離れるほど、自分は何者でありどう生きるのかという問題に直面するであろうということ、また、マジョリティから見れば彼らの生き方は「ノーマル」でなく、そうした他者の社会的反応は多かれ少なかれ差別的ないしネガティブ・サンクションであろうということ、しかし、公私の分離によって、公的領域ではそうしたことは一見無関連化されるということ、しかしまた、関連諸制度は往々にしてこの制度に則る生活単位（「家族」「標準世帯」等）を基準としているため、実際上の不利益があることなどであろう。さらに「逸脱」のこうしたコストとリスクは性別非対称である。上の制度は、性別二分法によりもっぱら一方の性に私的領域に中心を置く生を割り当ててきたからである。

2.「逸脱的」マイノリティのアイデンティティと「生きづらさ」への対処をめぐる2つのモデル

（1）アイデンティティの「モノポリー」モデル---ゴフマンにおけるスティグマ所有者

「逸脱的」とされる人々の生活については様々な経験的な研究があるが、「逸脱」の多様性に対して、一括した分析が可能な生活上の共通性に着目し、そのアイデンティティをめぐる固有の苦境を考察した社会学者に、E・ゴフマンを挙げることができる。彼の『スティグマ---烙印を押されたアイデンティティの管理についての考察』（1963）は、社会的期待から逸脱する望ましくない特性「スティグマ」を持つ者が、「常人」に包囲される生活誌の諸場面で、自己のアイデンティティを管理しつつその苦境を生きる技法を巧緻に記述したものである。私たちはここに、「逸脱的」マイノリティのアイデンティティと「生きづらさ」への対処をめぐる、理解の枠組みのひとつの典型を見い出すことができる。

ゴフマンによればスティグマとは、対他的な社会的アイデンティティ--- 普通最初に目につく外見から想定される社会的カテゴリーや属性--- と即自的な社会的アイデンティティ --- 実際彼があるところのそれ --- との間のある特別な乖離を構成するものである（Goffman 1963:3、以下 S)。この乖離が他者に知られると、当人の社会的アイデンティティは損われる。スティグマ所有者は、アイデンティティを常人からいかに同定され受容されるか、という問題を抱えつつ、表面上この乖離の無化に向けて努力するとされる。なぜなら彼らも常人同様、「異常な感情や信念を持っている場合も、その異常性を他者から隠すためにきわめてノーマルな関心を持ちきわめてノーマルな戦略を用いる」（S:131）からである。ゴフマンはそれを個人的アイデンティティの操作／管理の試みとして描いた[3]。

> 先にスティグマのある人の学習過程には二段階があることが指摘された。すなわち、まず常人の視角を習得し、次にその視角から見て彼が失格であることを理解するという二段階である。恐らく、次には、彼がその種の人間であると証明された種類の人間を他者が処遇する仕方に対処することを学習するという段階がある。さらにその後にはここでの私の関心事、すなわちパスすることを会得する段階がくる（S:80)。

スティグマ所有者は、常人のまなざしに縛られ、その視点から身の処し方を学ばねばならないような人々である。人は、自身が体現する対他的／即自的社会的アイデンティティ間の乖離をまさにスティグマとして重荷のごとく人知れず管理する者として描かれる 。人は沈黙し孤立し、「自己嫌悪と自己卑下」(S:7) という自己否定、自分を常人と同じであると同時に異なる人間として規定するというアンビバレンスと「根本的な自己矛盾」(S:106,109)のうちにあるとされ、常人社会への同調圧力の下で、自らのアイデンティティの偽装や隠蔽によって各場面を切り抜けようとする。ここに浮かび上がるのは、自身のアイデンティティを注意深く管理しスティグマを不可視化することが「生きづらさ」への基本的な対処法であるような主体像である。

さらに、この議論構成の中心に来る「アイデンティティ」概念は「社会的アイデンティティ」であり、それは、社会が人々を区分するカテゴリーや属性のことである (S:2)。人は誰も、当該「社会」における社会的アイデンティティ／カテゴリーの体系の下、アイデンティティを割り当てられることで何者であるかが社会的に画定される存在なのである。自分のアイデンティティについて自分勝手な解釈を行うことは、「いわゆる現実との関係を断つ」(S:10) ことである。

こうしたスティグマ論から浮かび上がるのは、アイデンティティのモノポリー体制と言うべき状況であろう。人は「社会」によりアイデンティティを付与されたり剥奪されたりする。そして不利なアイデンティティを付与されうる事情のある者は、それを回避すべく当座与えられているアイデンティティの管理に腐心する。それが彼らの「生きづらさ」への対処法である。これをアイデンティティの「モノポリー」モデルと呼ぶことにする。

（2）アイデンティティの「肯定主張」モデル---「クレイム申し立ての社会学」におけるマイノリティのアイデンティティ・ポリティクス

ゴフマンらの逸脱者観は後にキツセ(1980)によって、「過社会化」されていると批判されることとなった。私たちが今確認したのも、常人のまなざしを取得し自己否定的なアイデンティティ管理によって事態に対処していこうとする、社会への適応に過剰に配慮する人々の姿であった。それに対してキツセは、逸脱者の「自己肯定」と政治的抗議行動の場への「カミングアウト」に注目した。

> これまで制度的に是認された排除によって社会的に差別され、文化的に定義され、カテゴリー化され、スティグマを付与され、道徳的に貶められてきた人びとが、彼らの存在を公然と主張し胸を張って市民としての権利を要求し、社会問題提起のポリティクスに携わるということ、このことを私は論じたい(Kitsuse 1980:2-3)。

この課題を踏まえキツセは、人々のクレイム申し立て活動、「あるグループによるある状態が不快である、または望ましくないという知覚もしくは判定と、それを改善しようという集合的な試み」から始まる「社会問題活動」(Spector & Kitsuse 1977:143)に焦点を当てること

を提案した。研究すべきは、「ある状態が社会問題であるという定義」を構成し「自分にとって好ましくない状況に人びとの目を向けさせ、その状況を変えるために諸機関を動かそうとする社会のメンバーたち」(同:78)による活動とされた。なおこうした方法は、「クレイム申し立て活動」として分節化可能な社会的活動の存在を仮定している。背景には、60～70 年代アメリカにおけるマイノリティによる異議申し立て運動の活発化があった。

この新しい異義申し立て活動の担い手像には、ゴフマンのスティグマ所有者とは別の典型というべき主体像が含意されている。人々は、彼らを「逸脱」と定義する社会に異議を唱える。その活動主体は、個人であるよりグループである。メンバーは、彼らを共通の不利な立場に置くアイデンティティに自らアイデンティファイし、それに立脚して社会を問題化する。またその際、価値の語彙（「自由」「公正」「平等」等）は、現在の社会を「問題」として否定しその改変要求を正当化する資源となる。個人の「生きづらさ」は、放置すべきでない「社会問題」として表現される[1]。

さらにこのとき「アイデンティティ」とは、第一に、個人が社会からモノポリスティックに押し付けられるカテゴリーのことではなく、自ら引き受け、その因習的な意味を乗り越え変換していくもの（Kitsuse 1980:9, Anspach 1979:65)、一定の自覚の下に獲得するものである。ここには、強い自己アイデンティフィケーションという契機が含まれている。第二に、このアイデンティティは、同じアイデンティフィケーションを行う人々を結びつけ、集合的な行為の立脚点となる共通の社会的位置に立たせる。それにより人は、社会の構図--- 共通のアイデンティティを標榜する者（われわれ）とそれ以外の者とに少なくとも二分割されている ---を手に入れる。このようなアイデンティティと主体のあり方をアイデンティティの「肯定主張」モデルと呼ぶことにする。

（3）2つのモデルと現代日本

以上の2つのモデルは対照的なものとして示された。「モノポリー」モデルでは、人は社会的に付与されるアイデンティティを注意深く管理する。自己否定と社会への同調がその基調であった。「肯定主張」モデルでは、人々は自己肯定とともに共通のアイデンティティに依拠して連帯し活動する。基調は、自己肯定と社会の否定・改変である。前者はアメリカの 50～60 年代の逸脱論、後者は 60～70 年代以降の社会状況を踏まえた社会理論から抽出された。つまり両者は歴史的に配列される。「スティグマからアイデンティティ・ポリティクスへ」（Anspach 1979）と進んできたのである。だが、ここで単純な推移を想定しているわけではない。両者は共に現代日本で人々の置かれている状況を照らし出すものであろう。一方で人は、前者のような状況に今もあり、他方で、後者のような活動は、集合的な社会運動のひとつの雛形でもある。両者は、「逸脱的」マイノリティとしての主体の取りうるありようの2つの極ないし典型と見ることができる。

その上で現代日本に目を向ければ、その状況は、アイデンティティを注意深く管理するか公

然と主張するか、自己否定か肯定か、社会への同調か改変か、孤立か連帯か、という単純な二者択一的状況ではあるまい。私たちはそのいずれでもない状況をも見い出すだろう。両モデルを今一度歴史の文脈に戻すなら、両者は今見た対照の背後に共通のアイデンティティ観を持ち、そこからのさらなる距離において、現代の私たちの、そのどちらの極にも回収されえない状況を見ていくことができるのではないだろうか 。

3．現代社会にみる「逸脱的」マイノリティのアイデンティティと「生きづらさ」への対処 -異性愛者でない女性を事例として-

以下では、恋愛・性・結婚・家族の一連の制度に対して多様性を生きる者として、異性愛者でない女性に焦点を当てる。ここでは彼女たちを対象とした調査『３１０人の性意識--異性愛者ではない女たちのアンケート調査』(性意識調査グループ（以下性意識）1998)[5]からの公表データ（対象者本人による自由記述）を主に参照する。先述のようにこれらの制度からの「逸脱」は多様であるが、ここで見ていく事例はこうした多様性の部分である。

なお再度確認すれば、ここでの課題は、あくまで先に見てきた２モデルに回収されえない状況に目を向け、もっと別のアイデンティティのあり方と「生きづらさ」への対処が見い出されないか、その仮説的な見通しを得ることである。従って、以下の考察にあたって次の留意点を確認しておきたい。第一に、異性愛者でない女性のあり方それ自体を記述することは目指されていないということ。これと関連して第二に、データは、先の２モデルを支持するあるいはそれらにより理解可能であるような言説でないものに、特に焦点を当てているということ。さらに以上と関連して、参照するデータの性格についても、次の点を確認しておく必要があるだろう。既述のように、データは公表されたものである。当然そこには調査結果が全てもれなく羅列されているのではなく、調査実施当事者たちによる「編集」というフィルターがかけられている。公表データには、原データ全体を母集団とすれば、意図的・非意図的であれ偏りがあるだろう。だがこのことは、ここでの課題にとっては問題点であるよりも、むしろ自覚的に踏まえることで、ここから得ようとする仮説を位置付けるための有用な手がかりにしうると考えられる。以下に詳しく検討していく。

(1)「私」の多元性

調査によれば、異性愛者でない女性の間でセクシュアル・マイノリティであることの影響の主観的評価には幅がある。特に影響がないという人々は次のように述べる。

「セクシュアリティは私の一部でしかない。たった一部のことで、私の人生に影響されたくない。影響していないというより、影響されたくない。セクシュアリティがマイノリティだろうがマジョリティだろうが関係ない」。

「性的指向は、個人的なことであって、社会人として生活している限り、あまり関係ないと思っている。私は、レズビアンである前に社会人であるので、性的指向は自分の一部

分のことだから」。

「セクシュアリティで仕事や人生を決めるものではないと思うので。自分が何をどうやっていきたいかが、人生の上で重要なことだと思うから」(性意識:35)。

ここで言われているのは、セクシュアル・マイノリティであることの「私」にとっての部分性である（他に、橘(1999:45,47)等)。

非異性愛とは、スティグマ論では、異性愛が「ノーマル」な社会で端的にスティグマであり、当事者に決定的なアイデンティティを与えた。「肯定主張」モデルでは、人はまさにそれに自らアイデンティファイし、そこから社会に異義を申し立てた。両者に共通するのは、人をマジョリティから区別する特性への強いアイデンティフィケーション、及びそれに規定された生ないし活動である。人は「逸脱」的特性、そのアイデンティティの重みによって、マジョリティとは異なる場所に立っていた。

それに対してここにあるのは、「私」を多元的なものとして実感し、その一部分によっては自分は規定されない、とする感覚である。1つの要素に規定され振る舞うことは、アイデンティフィケーションの過剰であり、要素への「還元主義」(Gomez 1997:20)であり、自他いずれによるものであれ退けられる。2つのモデルでは個人を把捉しある社会的位置に投錨したアイデンティティの重みは、ここでは躱されている。それよりもむしろ多元的な「私」が強調される。

（2）既成のアイデンティティ・カテゴリーへの違和感と差異への感受性

調査は対象者に性指向を5つの選択肢[6]によって問うが、1つの回答を選んだ人々も往々にして留保を付け加える。

「他に適当な言葉がないので」「あまり好きな言葉じゃないけど」「レズビアンっていう言葉しかないと思うけど、どうもしっくりこない」「名付けること自体に違和感がある」(性意識:25-26)。

マジョリティは自分が何者であるかを問わず問われず、異質な他者にそれを問う[7]。マイノリティは常に問われ、マジョリティ本位のカテゴリーを付与され、それに「還元」されやすい。この非対称性において、「モノポリー」モデルでは、人は他者から問いを向けられないよう注意する者として描かれた。「肯定主張」モデルでは、人は否定的なアイデンティティの意味を変換し公然と自己肯定した。それが問いへの回答であった。両者に共通するのは、何者かという問いの有効性と回答の存在への信憑であろう。それに対してここに見られるのは、既成のカテゴリーによって問われ自問へと方向づけられていること自体への違和感であり、ストレートなアイデンティフィケーションの留保である。

「私」のあり方は、一度問い始めるなら既成のカテゴリーに対して常にそれ以上のものとして実感されよう。そこから新しいカテゴリーが生み出される。調査では、性指向と性自認各5つ[8]、合わせて25の選択肢の組合せが示されたが、これにも、選択肢が足りないという声(性

意識:272)、留保の言葉、さらに独自のカテゴリーが挙げられている。

「セクシュアリティ、性格 etc.、すべて自分は自分でしかないと考えているので、既成の言葉では表せない。性指向で言うなら、「バイよりのレズ」もしくは「レズよりのバイ」。でもやっぱり表しきれない」。

「ムリヤリいえば、バイセクシャル。「現象学的レズビアン」が現状。自分では「なんでもいいひと」と思っている」。

「ポリセクシュアル（立場としてはレズビアン）あるいはノン・ヘテロセクシュアル」。

「レズビアン風の Asexual」「両性具有、アンドロジナス」「フェミニスト・メンズリブ・トランスセクシュアル」(性意識:26-28)。

こうした差異への感受性は、「私」が１つの既成のカテゴリーに還元されることへの違和感であり、同時に１要素によって他の（マジョリティからみて「同じ」「逸脱」的特性に還元されうる）人々と同一のカテゴリーで分類されることへの違和感でもあろう。「モノポリー」モデルでは、人は孤立しがちであり [9]、「肯定主張」モデルでは、人々は公然と自己主張し集合的に活動することが可能であった。それに対してこうした自己への問いは、差異と個別性を浮かび上がらせていく。

（3）カテゴリーの過剰と無意味化

だが、いかに新たなカテゴリーを創出しても、感受される微妙な差異にとって充分ということにはならないだろう。しかも「私」は多元的であるとすれば、いかに細分化されようと特定の明確なカテゴリーで表現される「私」とは、その過度に単純化された仮像にすぎない。そうであれば、あるカテゴリーへのアイデンティフィケーションが仮になされるとしても、それは便宜的なもの、当座のもの、仮構という意識を伴うものとなるだろう。

一方で、カテゴリーの細分化や多様化は、あまり進むとそれ自体を無意味化していくであろうし、他方で、そうしたカテゴリーへのアイデンティフィケーションは、ますます仮構のものであるという自意識を促進するだろう。この先に、「私」を表わすカテゴリーは不要、既成の言葉で表現しようと思わない、という態度、ひいては「私は私」という究極のアイデンティティが見えてくる。

「自分は自分、私は私。言葉で表わす必要はありません」「すべて自分は自分でしかないと考えているので、既成の言葉では表わせない」「名付けること自体に違和感がある」

「自分そのもの！　いちいち分ける必要はないでしょう」(同:26,27)。「セクシュアリティやジェンダー、セックスなどのカテゴリーをなくさへん？」(同:289)。

（4）「私は私」であること

以上から見えてくるアイデンティティと主体をまとめる。「私」は多元的であり、その一部に依って立つあるいは拘束されることは、アイデンティフィケーションの過剰であり退けられ

る。既成の特定のカテゴリーへのアイデンティフィケーションは違和感と共に留保され、１要素を通じた共通性より、むしろ多元的「私」と他者との差異に目が向けられる。差異に応じたカテゴリーの多様化や細分化は、カテゴリー自体を無意味化し、それらへのアイデンティフィケーションを仮構化するだろう。ここに、「私は私」「自分は自分」というアイデンティティが浮かび上がる。

このとき、アイデンティティはモノポリスティックに社会から付与されるものであるより、個人の私的な自己理解あるいは自己定義とでも言い換えるべきものであろう。しかも、自己理解・自己定義を既成のカテゴリーに即して示すことに違和感があるという事態において、共通性よりも差異・個別性に焦点が移行しており、アイデンティティは端的に「私が私であること」に近いものとなる。「アイデンティティ」に託される意味は、先の２つのモデルとは異なっていると言える。

４．「生きづらさ」と社会

（１）集合的アイデンティティと現代社会における「私」

では「私は私」アイデンティティへと接近するとき、人は、当該社会における「生きづらさ」にいかに対処しうるのか。「モノポリー」モデルでは、アイデンティティの管理、自己否定と常人社会への同調が、その対処法であった。「肯定主張」モデルでは、人はアイデンティティを掲げ、自己肯定と現行社会の否定と改変を企図する。歴史的には、このような能動的主体が否定・改変しようとしたのは、まさに前者の「アイデンティティのモノポリー」体制であり「アイデンティティの管理」強制的な社会であった。そしてその力は、人々が共通のアイデンティティに立脚して集合的に活動することによって示された。つまり、集合的アイデンティティへのアイデンティフィケーションには、政治的に積極的な意味と機能があった。これに対して、「私は私」というアイデンティティが、むしろ集合的アイデンティティへのストレートなアイデンティフィケーションを留保させ、それを分解させていく方向性を持つことを先に述べた[10)]。

では他にいかなる選択があるのだろうか。調査によれば、「今、自分のまわりの人、社会の人に一番言いたいこと」として、もちろん反差別に言及する声などが多々挙げられているが、先の２モデルで解釈可能なものの残余に次のようなものがある。

「セクシュアリティがなんであれ、生きていく上で大切なのは、どんな仕事をして、どう楽しく生活していくか、だと思う」。

「そんなにイキまいて言いたいことはありません。このまま２人で自由に幸せに暮らせたら問題ない」（性意識:288-290）。

ここには、「私」の私的な生活を自分なりに築き充実させていくことへの志向を見ることができる。これはプラマーが「親密性の市民権」と呼ぶ権利、後期近代社会において「大きなストーリー」のあとに出現しつつある要求、すなわち「もっとも親密な欲求、楽しみ、世界の中

の生存のあり方に結びついたありとあらゆる事柄」に関係する（Plummer 1995:322)、新しい関係と生き方に関する新しい要求に対応するのかもしれない。「肯定主張」モデルで見た「自由」「平等」「公正」などの価値の社会的実現要求という大きな目標に代えて、上のような語りにおいて求められているのは、「私」が「私」のままで楽しく幸せに生活していけること、である。

そのために必要なものとして、セクシュアル・マイノリティであることの人生への影響を認める人々が多く言及するのは「経済的自立」である。

「ケッコン（男と）しない。できない。故に経済的に自立してなければならない」。

「好むと好まざるとにかかわらず、とにかく「食べて」いかなくては、と考えているのは、「いつか結婚する」なんて考えていないからだと思う。自分自身のセクシュアリティに気づいた時、そのことが自分にとって重大なことだと思った」(性意識:29-30)。

結婚しないため経済的自立が必要、とは、経済的に自立していれば結婚せずにいられる、ということである。ここで言われているのは、労働により経済的生活基盤を確保することで、自分たちに合った生き方を、近代家族の制度から逸脱しても築いていけるという可能性である。デミリオは、資本主義の発達が、家族への依存を必要とした諸個人に家族の範囲を超えて個人生活を組織化していくことを可能にする諸条件を創出したとし、またそのことがゲイ・アイデンティティを可能にしたと述べる(D'Emilio 1983:150)。

個人が労働によって自活可能であるような現代社会において、恋愛・結婚・性・家族の制度からの「逸脱」による「生きづらさ」への対処、さらに言えば「逸脱」の「自由」は、個人の経済力、広義には生活力によってある程度可能と考えられており、それを一概に否定することはできないように思われる。実際に彼女たちが経済的自立を手に入れ行使しえているかどうかは別にしても、それが努力の方向の一つと目されていると言うことはできるだろう[11]。

（2） 相対主義と無関心

上のような行き方を取り巻く他方の条件に、「差別的視線の弛み」(河野 2000:364) がある。「モノポリー」モデルでは、常人の差別的なまなざしは、スティグマ所有者の「生きづらさ」の源であり、「肯定主張」モデルにおけるアイデンティティ・ポリティクスは、こうした差別への異議申し立てであった。両者に共通するのは、「逸脱」に対する社会の否定的・抑圧的な力の存在であり、主体はそれに対処しなければならなかった。現代ではどうか。先に述べたように、2モデルに該当する状況は依然存在するだろう。ここで見るのはその残余部分である。

調査では、差別されていると感じることの有無について、その回答は半々である[12]。

「今は個人主義者が多いから‥。カムアウトしてもそれほど差別されることはありません」。

「おどろかれることはあるが、嫌がる人はまずいない」(性意識:274)。

ジンメルが論じたように、都市では人々は相互の冷淡さと無関心によって、個人的自由を手に

する(Simmel 1903(1994):277)。都市は、異質性、多様性をより許容する。だが、それは必ずしも異質な他者への「理解度の深まり」ではなく、「何事も相対化し」「異端までも相対化されてしまって、異端ではあり得な」（河野 2000:364）くする無関心によるものであろう。そこで「異端」は一風景となる。あるいはサブカルチャーとして消費される。スティグマ所有者をそのアイデンティティの重みに釘付けにしたような否定的まなざしが依然としてあるにしても、他方では「ライフスタイルの島々」(Gitlin 1994:169)に分化した人々の、無関心による相対主義もそこにあるのではないか[13]。

（3） 自立・自助努力という行き方

こうして浮かび上がってくる1つの行き方は、現行社会内での「私」個人の広い意味での生活力による自立・自助努力による「生きづらさ」への対処である。もっとも人は必ずしも孤立しておらず、「私」の関係者「仲間」との互助努力をもなしえるであろうが。これに対応する関心は、アイデンティティ管理によって社会的にパスすることではなく、また共通のアイデンティティを掲げる人々と共に社会を変え問題を解決していくといったことであるよりも、「私」と周囲の関係者からなる個人的生活の快適さや充実であろう。そしてこうした行き方を差し当たり可能にしているのは、後期資本主義の豊かなそして都市的な現代社会であると先に述べた。そしてこのような行き方とは、実は現代社会において「逸脱的」かどうかに関わらず、「自己責任」の名の下に成員が等しく要求され巻き込まれている方向でもあるのではないだろうか。

5．おわりに---個人の問題経験と社会

以上見てきたアイデンティティと「生きづらさ」への対処は、それ自体多様な可能性の中から捉えることのできた1つの仮説的な見通しである。また参照したデータの性格上これは、「現状」よりも「志向」として見る方がよいであろうし、しかも、マイノリティであることをめぐる思考とその言語化に巧みであるような人々のそれであるとも留意すべきであろう。そもそも質問紙調査の自由記述はそのような思考と言語化を求める点で言わば回答者を選別し、さらに編集作業を経ることで、データはすでに二重の選別を受けている。もっと遡れば、行なわれた質問紙調査の方法自体回答者を限定する。しかしまた、まさしくそうした選別、とりわけ公表の意志によって選別された言説から見えてきた限りにおいて、ここで見たあり方は、当事者たちにとって1つの行き方として否定されることなく示されたものといってよいであろう[14]。こうしたことを踏まえ、以下に、「私」のアイデンティティと行き方をめぐって、個人の「生きづらさ」がいかに社会へと媒介されうるのかという最初の問いについて考えたい。

まず、諸個人の自立・自助努力の集積は、確かに社会を徐々に変化させていくだろう。上のような女性の努力の方向はそれ自体、先の制度が女性に求めた生き方に対する別の可能性の追求であり、制限されてきた多様性を顕在化させていくものである。

しかし個人にとって、「生きづらさ」に個人的な自立・自助努力によってのみ対処することには限界があると思われる。第一に、「肯定主張」モデルに見い出されたように、個人の「生きづらさ」は社会のあり方の問題として対処されうる側面を大いに含むにもかかわらず、こうした対処には社会を問題化する契機が含まれていない。生活に関する諸制度は、「逸脱」者の利益を守るよりもむしろ不利益をつくり出しているだろう。相対主義的な無関心についても同様である。制度の問題化を阻むのは多様な生の可能性に対する無関心だからである。人々がもっぱら自立・自助による個人的解決に向けて駆り立てられていくならば、こうした問題はその外に放置されよう。

第二に、自立・自助努力は、個人の労働力としての有限性や不安定性、さらには序列、また市場の不確実性等によって限界づけられており、またそれにも拘らず、個人に「自由労働システム」へのより多くの依存をもたらす。そうした努力の限界において破綻するような生き方は、潜在的に著しく不安定なものと言わねばならない。

確かに、そうした不安定性を「自由」のコストとする見方もある。しかしこの見方は、多様性排除の論理に加担するものである。不安定さを個人の支払うべきコストとすることは、一方で、そもそもそのような状況をつくり出している仕組みを置き去りにし、他方で、個人にその力量と自己責任を問うことで「生きづらさ」を個人に帰責する。そのことは結果的に、人々を自立能力における強者と弱者を分断し、後者に対して生き方の自由を抑圧することになるからである。

では、人々に共通の問題を分節化しそれに集合的に対処する、という個人的経験の社会への媒介、そのような活動可能性の回路はいかなるものか。「肯定主張」モデルでは集合的アイデンティティが共通の立脚点としてあった。現代の「私」たちにとってもそれは「アイデンティティ」として構成されうるものであろうか。もしそう呼ぶとすれば、それは、各人が部分を通じて部分的に連なる、それゆえに閉じられないネットワークであり、必要に応じてその都度共通の「アイデンティティ」を仮構的に立ち上げるという、よりアモルファスな「アイデンティティ」であろう[15]。あるいはこれをあえて「アイデンティティ」と呼ばなくてよいという考え方もありうるだろう。「アイデンティティ」の意味は、個人の私的な自己理解・自己定義というほどのものとなっていた。そうであれば、それと「私」を超える立脚点との間には観念上のギャップがあろう。しいていえば、その立脚点となるのは「私」たちに共通の関心のインデックス（索引）とでも言うものかもしれない。

最後に、多元的で個別の「私」への投錨とその表現も、現代において個人の「生きづらさ」を社会に媒介する機能をそれ自体として持つだろう。ここで見てきたような言葉は、現代では情報として流通し、多様な生き方と人々の「私」のままの要求を、目に見えるものにする。ゴフマンのスティグマ所有者は、自らを隠蔽する情報管理によって生きようとする人々であった。そのような努力は多様性を自発的に不可視化することで自らの有り様を社会的に抹消することにさえ貢献してしまう。他方、集合的な異義申し立て活動においては、人々は集合的アイデン

ティティのもとに結集し社会を改変する、という大きな課題を負う。その活動の媒介機能は強力でありうる。しかしそのとき集合的アイデンティティとそれが要求する行動規範は参加者の個別性や差異を凌駕し、その過程で個々人の多様性・個別性は抽象される。このようなアイデンティフィケーション（同一化）が「私」にとって過剰と感じられがちであることはすでに見た。個別で独自の「私」に投錨しそれについて具体的に語ることは、端的に多様性を社会的に顕在化させるであろうし、同時に「私」を超える回路へと個々人を相互に開くものとなりうるのではないか。

このような「私」は、「肯定主張」モデルにおいてみたように、普遍的価値に依拠して社会自体を問題化するような全き「外部」に立つことはないのかもしれない。個人を単位とした「ノーマル」と「逸脱」、「マジョリティ」と「マイノリティ」といった分かりやすい構図のなかに「私」はいないのである。それでも、人はその都度の立脚点において相対的な外部に立つことにはなるのではないだろうか。そこここで多様な生き方をしようとする人々のアモルファスな活動と言説の増殖は、「社会運動」という組織化され人格化された強い形をとらないとしても、個人の経験を社会へと結びつけそれを次第に変容させていくのではないだろうか。

【註】

1）本稿は、2000 年７月早稲田社会学会大会シンポジウム「価値とアイデンティティ――『ポストモダン』以後の理論的可能性」で行った報告を加筆修正改訂し、同１２月日本現象学・社会科学会大会での自由報告を経てさらに大幅改訂したものである。貴重な御意見、特に御批判を下さった両学会関係各位に感謝する。また『３１０人の性意識』調査グループ志木令子氏他関係各位に感謝する。

2）例えば日本国憲法第 13 条。

3）ゴフマンはアイデンティティを、社会的／個人的（personal）／自我（ego）アイデンティティの３つの水準に分ける。詳しくは Goffman(1963:106)。個人的アイデンティティについては同（1963:57)。

4）なおそのような主張が意味をなす前提には、活動の担い手と受け手の間に普遍的な価値が共有され、価値実現に向けて社会を変える責任と能力を成員が分有するという共通認識が必要である（草柳 1998)。

5）１９９６年１０月から翌年にかけて行なわれた質問紙調査。調査票はレズビアン、バイセクシュアルのグループ、ミニコミ誌ほかを通じて約２０００部配布され３１０通回収された。対象者は「ノン・ヘテロセクシュアルで、かつ内性器的に生来女性である方」（調査票より）である。

6）レズビアン、バイセクシュアル、ヘテロセクシュアル、わからない、どれでもない

7）「レズビアンってどういうもの？　異性愛者とレズビアンの境界はどこにあるの？（おまえには答える義務がある)」（掛札 1997:166）。「(マイノリティは）世の中から理解されていないがゆえに、常に説明を求められる」(伊藤 1999:19)。

8）女性、ＴＧ、ＦＴＭＴＳ、わからない、どれでもない

9）ゴフマンもスティグマ所有者の「同類」集団への帰属について論じるが、彼の議論における彼らは常人の見方に深く捕らわれているため、「同類」に対する感情は「反感」や「恥ずかしさ」を伴うアンビバレントなものであることが強調される（S:107-108）。

10）この分解は、セパレイティズムとも異なるものと思われる。ギトリン(1994)は、合衆国において、１つのアメリカ、連帯する左翼、といった観念が後退し、人種、民族や性別、性的指向といった差異の強調によってセパレイティズムが席巻するようになったと述べる。しかしこのことは、人種、民族といったアイデンティティが「本質的」なものとして実感され使用されていることに関連しているのではないか（例えば Storrs:1999)。

11）このことは上の制度の効果により性別非対称である。男性は、公的領域での労働はこの制度下でもともと期待されており、そこで「逸脱」を不可視化するならば、彼らはマジョリティと変わるところがない。ヴィンセント他は、この識別不可能性は男性同性愛者を、男性異性愛者の特権維持の共犯にしているとさえ言える、と指摘する（ヴィンセント他 1997:95)。

12）ある：46.1%、ない：47.4%、NA：6.5%。

13）河野多惠子は藤野千夜著「夏の約束」の芥川賞選評で述べる 。「彼等は世間の差別的な視線とうまく折合いをつけている。それが可能であるのは、差別的な視線が弛んだからで、この作品のこわばりのなさは、作者の才能と実力に加えて、そのこととも無縁ではないだろう。しかし、差別的視線の弛みは、世間の寛大化や理解度の深まりの結果などではない。何事も相対化してしまう、今日の風潮の結果に外ならない」（河野 2000:364)。作中、他者の差別的態度をやり過ごす主人公が、自分たちも「人を差別したり見下したり笑ったりなんてしょっちゅうしている」として、他者の「一生誰かを笑っていく」ような人生を「幸せ」と言うとき、彼もまたそんな他者に無関心なのではなかろうか。

14）こうした行き方がどう評価されるかは別問題である。同調査グループの中心である志木は、こうしたアイデンティティのあり方にむしろ批判的である。「自分が何者かわからなくていいじゃないと堂々と言えてしまう土壌」を 90 年代はつくったとして、それを「半分は必要なこと」だが「半分ものすごく弊害ではあった」と述べる（志木他 1999:94)。

15）「多元的なアイデンティティと分割されたロイヤリティ」(Calhoun 1994:26）という行き方を否定することはできないのではないだろうか。

【文献】

Anspach, R. R.　1979　"From Stigma to Identity Politics: Political Activism Among the Physically Disabled and Former Mental Patients," *Social Science & Medicine*, 13A:765-773.

Becker, H. S.　1963　*Outsiders*, Glencoe, Ill.: Free Press. 村上直之訳、『アウトサイダーズ』新泉社 1978.

Brubaker, Rogers, and F. Cooper　2000　"Beyond "Identity", *Theory and Society*, 29:1-47.

Calhoun, C.　1994　"Social Theory and the Politics of Identity," Calhoun, C.,(ed.)　*Social*

Theory and the Politics of Identity, Blackwell Publishers.

D'Emilio 1983 「資本主義とゲイ・アイデンティティ」風間孝訳、『現代思想』1997.5. Vol.25-6.,145-158, 青土社.

藤野千夜 1998 「夏の約束」『群像』12 月号.

Gitlin, T. 1994 "From Universality to Difference: Notes on the Fragmentation of the Idea of the Left,"Calhoun, C.,(ed.) *Social Theory and the Politics of Identity*, Blackwell Publishers.

Goffman E. 1963 *Stigma: Note on the Management of Spoiled Identity*, ' Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. 石黒毅訳『スティグマの社会学---烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房 1987.

Gomez, J. L 1997 "The Event of Becoming," Duberman (ed.) *A Queer World*, New York Univ. Press. pp17-23.

伊藤悟・梁瀬竜太 1999 『異性愛をめぐる対話』飛鳥新社.

掛札悠子 1997 「抹消（抹殺）されること」河合隼雄・大庭みな子編『家族と性』岩波書店.

Kitsuse J. I. 1980 "Coming Out All Over: Deviants and the Politics of Social Problems," *Social Problems*, 28-1: 1- 13.

河野多惠子 2000 「芥川賞選評 二受賞者について」『文藝春秋』2000.3.:364-5.

草柳千早 1998 「『問題経験』の語られ方---クレイム申し立て研究の歴史的性格と現代」『社会学年誌』39 号.

Melucci, Alberto 1996 *Challenging Codes: Collective Action in the Information Age*, Cambridge University Press, UK.

Plummer, K. 1995 *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*, Routledge,NY, 桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳『セクシュアル・ストーリーの時代---語りのポリティクス』 新曜社, 1998.

性意識調査グループ 1998 『３１０人の性意識---異性愛者ではない女たちのアンケート調査』七つ森書館.

志木令子他, 1999, 「私たちの 90 年代」伏見憲明編『クィア・ジャパン』Vol.1, 勁草書房.

Simmel, G. 1903(1994) 「大都市と精神生活」酒田健一・熊沢義宣・杉野正・居安正訳『ジンメル著作集 12』白水社.

Spector, M., & J. I. Kitsuse 1977 *Constructing Social Problems*, Aldine de Gruyter New York, 1987, 村上直之、中河伸俊、鮎川潤、森俊太訳『社会問題の構築----ラベリング理論をこえて』マルジュ社, 1990

Storrs, D. 1999 "Whiteness as Stigma: Essentialist Identity Work by Mixed-Race Women," *Symbolic Interaction*, 22(3):187-212.

橘来香 1999 「バイセクシュアルというアイデンティティ」関修・木谷麦子編『セクシュアリティ入

門』 夏目書房.
高橋徹　1985　「後期資本主義社会における新しい社会運動」『思想』No.737, pp2-14.
キース・ヴィンセント・風間孝・河口和也　1997　『ゲイ・スタディーズ』青土社.
山口節郎　1985　「労働社会の危機と新しい社会運動」『思想』No.737, pp15-36.
山之内靖　1991　「システム社会の現代的位相---アイデンティティーの不確定性を中心に---」上・下,『思想』1991.6, 1991.7, 岩波書店.

（くさやなぎ　ちはや　大妻女子大学社会情報学部）